

2022年12月7日取材

愛知県

産地レポート

ミニトマト

異常茎(めがね)発生の少なさが
JA豊橋 高糖度ミニトマトの品質とブランド力向上へ!
「TY千果」導入の決め手!

JA豊橋 営農部 指導推進課 鈴木 博明



↑左からトヨタ株式会社営業部豊橋営業所の渡邊雄裕さん、ミニトマト部会生産者の村上広貴さんと筆者。

JA豊橋ブランドの高糖度ミニトマト

JA豊橋ミニトマト部会の部会員数は118名、生産面積は約46haで4114tの販売数量を数え、年間の販売金額は28億8400万円に達します。養液栽培の導入を積極的に進め、栽培技術を平準化させることで、生産基盤の強化を図っています。現在、ミニトマト部会での養液栽培の導入割合は9割にのぼり、環境制御機器による高糖度トマト栽培を約75名の生産者が取り



JA豊橋の本拠地である豊橋市は、愛知県の東南部に位置し、南方は太平洋に面し、東北の二方は山脈に囲まれ、おおむね平坦な地域が広がっています。冬季には、北西の季節風が吹き肌寒いこともありますが、日照に恵まれ比較的温暖な地域です。立地条件のよさから農業が盛んに行われており、野菜、果樹、花き、水稻など多種多様な作物が栽培されています。露地品目ではキャベツ、施設品目ではトマト・ミニトマトの販売高が多くを占めており、全国でも上位の農業算出額を維持する産地です。

組まれています。定植は7月から8月下旬、収穫は9月上旬から翌年の7月上旬、管内全域で盛夏を除き、ほぼ1年を通じて栽培が行われています。

主力品種は「小鈴」系ですが、生育初期の異常茎(めがね)の発生が少なく、高温着果性にすぐれ、初期収量が確保できる「TY千果」を使う生産者が年々増えてきました。

JA豊橋では、農協の出荷基準をクリアしたレギュラーアイテムに加え、糖度9度以上のミニトマトを「麗」、8度以上を「美」、7度以上を「愛」として

※本文中で紹介されている品種にはタキイ通販で取扱いのないものもございます。



↑「TY千果」を糖度計で測ってみると9.1度を示した。



↑色・甘み・さわやかな酸味のバリエーションが豊富な「あまえぎみ」。JA豊橋のブランドミニトマトとして人気。



↑北海道～大阪方面へ出荷されるミニトマトのケースを手にする筆者。



↑赤く色づきはじめた「TY千果」。割れをおそれて早く収穫してしまうと、糖度がのらない。高糖度ミニトマトは収穫時期の見極めが重要。



↑7月21日定植の村上さんのハウス。最終40段以上にもなる高軒高ハウス。

異常茎が発生しにくい 品種の模索・村上広貴さん

管内の高糖度ミニトマト部会の生産者、村上広貴さんは2016年より親元就農を機に、葉物野菜から高糖度ミニトマトの生産に転換。環境制御システムやココヤシ有機培地を利用した養

高糖度ミニトマトのブランドを構築。当地の主力となっています。糖度検査は、圃場と出荷前ごとに実施し、合格したものだけが各名前を付けて出荷することが出来ます。糖度を明確にして販売することで、消費者に「おいしさ」を客観的に伝えることができ、他産地との差別化を図っています。

そして、さらなるバリエーションとして、カラー系、ヘタなし長径の高糖度ミニトマト「あまえぎみ」もあります。

液栽培で、安定した糖度と収量確保を目指されています。しかし、成長点の先端付近の茎が縦に裂開して、めがねのように穴が開く異常茎の発生に苦慮されていました。草勢にブレーキをかけながら栽培していたのにも関わらず、異常茎が発生。初期から樹を作り、芽先をそろえていくことが理想ですが、異常茎が発生すると芽先が乱れます。

村上さんは、異常茎を回避できる品種を模索されます。2018年に数本試した「TY千果」は異常茎の発生がなく、2020年から本格的にハウス一棟単位で試作を開始しました。

村上さんは、「悩んでいた、めがねの発生が少なくなった」と喜んだうえで「TY千果」は、糖度がのりやすい品種だと評価されます。注意点としては、「草勢が強く生長が早いので、手が追いつかないと樹が込み入ってしまう、時期によっては割れも少し出てしまうことがあります」と管理のコツを話されました。ほかの生産者にも、メリット・デメリットをしつかり共有して試作を重ね、異常茎発生の少なさや、高温着果性のよさによって、2022年から部会の暦に掲載しています。

よりよい品質を求める村上さんは、さまざまな品種の試作を続けておられます。試作中の「T.M.180」もそのひとつ。「節間が短く、水を欲しがる

タイプ。めがねにならず、着果もよいので、低軒高ハウスのレギュラーアイテム向きに有望だと思います」と、収量重視の生産者にとっても、早くから収穫できるよい品種になるのではと、期待されていました。

品種開発への期待

資材の高騰や販売価格の下落など、農家経営は逼迫してきています。また、近年は異常気象や高温傾向にあり、コナジラミ類が増加し病気の発生が懸念され、栽培技術だけでは解消できない場面が発生してきます。このような状況だからこそ、種苗会社には産地に寄り添った、現環境に適合した品種開発に力を入れていただきたいです。リスク回避には品種の使い分けが重要になってくると思います。



↑「TY千果」は糖度がのりやすいと村上さん。糖度8度以上の「美」を出荷されている。